

## 「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
00-003	ベトナム西北地方タイ村落における染織物生産の研究		
	ベトナム	ハノイ国家大学	2000.10 ~
	榎永真佐夫	東京大学大学院	院生博士

### 研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

申請者は、ベトナム西北地方に位置するトゥアンザオ県のタイ(黒タイ)族村落を対象に、1954年以降の「貧しさを分かち合う社会主義」といわれる社会主義化や、1986年に始まったドイモイ(刷新)といわれる市場開放化政策による急速な経済発展という政治経済的脈絡の中で、ものと社会の相互関係について研究している。特にタイ村落内における染織物生産に焦点を当て、伝統技術の継承と変化について考察している。

これまでベトナム西北地方タイの農民経済は、均質的、平等主義的、自給自足、非市場、不変というイメージを民族誌等によって与えられてきた。確かに農作物の商品化はあまり発展せず、主要な食糧の多くは水田、焼畑、菜園などで自給している。しかし、染織物生産等手工芸に焦点を当てると、世帯や村ごとの分業、交換財としての布の流通と蓄積、村や地域を超えた交易、生産者と消費者の分化が見られ、タイの農民社会が前資本主義的な自給自足経済であることが否定される。

本研究の目的は、タイの染織物、特に女性が日常的に使用している「カン・ピョウ(藍染めの綿布に装飾刺繍が施された頭巾)」について、村落内における染織物の生産と使用を分析することによって、農民社会と資本主義の関わり合いに関する理解を促進することである。

ベトナムでは、公的な分類範疇に基づいて国民一人一人が民族に分類されていて、民族誌、テレビその他メディアでも、しばしば民族衣装で飾った女性の肖像は民族的帰属の表徴として扱われている。タイの場合、カン・ピョウはしばしばその重要なアイテムである。また、タイ村落におけるカン・ピョウ生産をはじめとする手仕事としての布生産は、資本主義化以前の牧歌的な自給自足的村落生活を代表するものとしてイメージされている。実際、カン・ピョウがタイの伝統的な装飾物であるという認識は、タイの人々の間でも広く共有されている。しかし、申請者による資料調査では、カン・ピョウについて1960年以前の記述や映像資料は珍しい。また近年、タイの村人の日常生活と市場を介した経済活動の関わりはますます密接になりつつあり、しかもカン・ピョウは主に商品生産や趣味として生産されていないにも関わらず、その生産と普及は、市販の原色木綿糸の購入など、タイ農村に対する商品経済の浸透と深く結びついているという現状がある。

従来の視点では、資本主義による包摂は均質な商品の普及をもたらすとされるが、カン・ピョウの場合、タイ社会が資本主義に接合される過程で、むしろ非商品としてまず普及した点に特徴がある。本研究で申請者は、カン・ピョウの生産と使用がどのようにして普及していったか、特に1954年以降のタイ村落の経済生活や社会関係の変化と関連づけて考察し、農民社会における経済領域の理解に新しい視点を導入する。

氏名：樫永真佐夫

所属（現在）：国立民族学博物館

留学先国：ベトナム

留学先機関：ハノイ国家大学 ベトナム文化研究交流センター

留学期間：2000年10月～2003年3月

## 【研究テーマ】

ベトナムの黒タイ村落の父系的親族関係について

## 【成果報告】

報告者は、「ベトナム西北地方ターイ村落における染織物生産の研究」という題目の留学研究を実施するために、当奨学金を受給することができた。しかし、2002年4月から2003年3月の留学期間において、奨学金申請時の題目「ベトナム西北地方ターイ村落における染織物生産の研究」に沿った研究を実施することができず、研究題目も「ベトナムの黒タイ村落の父系的親族関係について」に変えることになった。その2つの理由について、まず以下に述べたい。

1、2000年2月に中部高原地域で発生した暴動以降、外国人調査者が少数民族居住地域で長期にわたる現地調査を実施するのが困難になりつつある。少数民族が多数居住する西北地方も例外ではない。そこで、2000年以前のように、ライチャウ省トゥアンザオ県の黒タイ村落に長期滞在しての調査は実現しなかった。以上の理由で、染織物生産をめぐる社会経済のミクロな現状を継続調査することはできなかった。ベトナム留学期間の約11ヶ月のうち、現地調査を実施し得た期間は、1月あまりにすぎない。これら現地調査の内容などについては後述するが、この現地調査も、奨学金申請時に予定していたトゥアンザオ県において実施されたのではない。したがって村落の社会経済について深く知るために、初めての人々と信頼関係を築くだけの時間さえ不十分であった。2、一方、現地調査が不可能になったために、報告者はベトナムにおける指導教官であるカム・チョン教授から黒タイ語と黒タイ語文書解読を中心にハノイで学ぶことになった。報告者は、その中で黒タイの年代記、慣習法、家譜などの文書に多く接することができ、むしろそちらの方を研究の中心テーマに据えることにした。報告者の関心は、文書の中でどのような親族関係を黒タイが実現しようとしてきたのか、また、こうした文書の中の親族関係が、これまで報告者が蓄積してきた、村落における相互扶助関係や染織物の自給的生産などで実践される親族関係のデータが、どのように符合し、どのように齟齬しているかに関心を持ったからである。

研究テーマの変化に伴い、現地調査における調査内容も変化した。2002年に実施した現地調査の時期、土地、内容について述べたい。1、2002.6.17?2002.7.5：ベトナム西北地方ラオカイ省タンウエン県におけるターイ族村落現地調査（同行者なし）

この調査では、1945年以前のタンウエンにおけるターイの政治社会組織がどのようなものであったかについて、また、タンウエンは黒タイ、白タイが混合居住しているが、それがどのような歴史的背景に基づくものかについて、聞き取りから再構成した。さらに、両者が祖先祭

祀においてどのような相違点を持っているかを比較した。

この調査によって、1945年以前のタイの政治社会組織について、断片的にしかわからなかったが、19世紀以降、おもに戦乱と土地不足によって住民が移住し、黒タイ、白タイの共住村落が形成されてきたことは明らかになった。また、祖先祭祀においては、白タイと黒タイの間で、祭壇の形態、儀礼開催日などにおける差異が維持されながら持続していることがわかった。しかし、両者とも、記憶している祖先の世代深度は3、4代にとどまり、家譜などは保持していなかった。タイの文書自体が、タンウエンではあまり伝えられていなかった。

2、2002. 11. 10?2002. 11. 19: ベトナム西北地方ソンラー省トゥアンチャウ県におけるタイ族村落現地調査（同行者：ハノイ国家大学ベトナム研究交流センター、カム・チョン教授）

トゥアンチャウは、黒タイの大きな中心地の一つである。19世紀末まで、トゥアンザオもトゥアンチャウに属していて、トゥアンザオの首領はトゥアンチャウから派遣されてきた。その点で、トゥアンチャウでの調査は、トゥアンザオでの資料を補足する意味を持っている。とくに、トゥアンザオでの平民村落での親族関係、系譜意識と、トゥアンチャウの貴族村落での親族関係や系譜意識の比較の点で重要である。

1945年以前のトゥアンチャウにおける黒タイの伝統的な政治組織については、文書も残っている。それら資料をもとに、かつての貴族の村、平民の村、半隷属民の村を訪れ、それぞれの村における系譜意識の差、伝承されている文書の量と種類の差について比較した。これによって、伝統的貴族出自、あるいは貴族お抱えの司祭階級の子孫が多く居住する村において、記憶されている祖先の系譜深度は深く、場合によっては二十代以上に及び、また年代記、家譜、詩歌の文書、呪術文書などが多く伝承されていることがわかった。一方、平民村落や半隷属民村落では、記憶されている祖先の系譜深度は3、4代と浅く、伝承される文書は少ないことがわかった。

上記の通り、今回の留学研究での研究題目は「ベトナムの黒タイ村落の父系的親族関係について」と変えることになったが、留学期間を終えて考えてみると、研究成果はそれにとどまったわけではない。この1年の研究成果について、整理すると以下ようになる。

1、 東南アジア大陸部山地には、言語や習慣が異なるさまざまな民族がモザイク状に入り組んで居住している。一見それは牧歌的すみわけに見えるが、実はさまざまな力の作用に基づく歴史的産物である。報告書はとくにベトナム西北地方を例に、モン、タイなど少数民族の言語や文化の現状を、ベトナムにおける民族的マジョリティであるキンとの関係から考察した。近年のインフラや流通の整備と改善によって少数民族の居住する地域とデルタ地域の経済的結びつきが急速に強まり、言語面では、教育などを通してキン語（ベトナム語）がより浸透していくのが趨勢であるといえる。しかしその、一方、観光化による経済的影響が大きいサパのモンのように、キン語より英語習得を優先するような興味深い例もあり、市場経済化を進めるベトナムにおいては、国民国家化と脱国民国家化が同時進行である現状を示

した（→「拡張するデルタ世界」、「ベトナム西北山地の国際関係論」、「書評：『黄金の四角地帯? シャン文化圏の歴史・言語・民族』」）。

2、 伝統的にムオン（ムアン）という盆地政体を築いてきた黒タイは、紙に書かれた文書を伝えてきた。非仏教徒である黒タイは、タイ系民族の原初的な政治組織や社会構造をもっても色濃く残しているとして、従来タイ研究者に注目されてきたが、なかでも年代記は黒タイの歴史、伝統的な政治体系、中国や東南アジアなど、周囲の大規模社会との政治的、経済的関係を知るうえで重要な資料である。報告者は、これまでの黒タイの民族学的研究成果をふまえ、年代記の内容を詳細に紹介した。そこでは黒タイ支配階層が、フランスによって統治される以前、キンの王朝やラオスなどとの政治的つながりをうまく使いながら、事実上の独立を維持してきた様子が生き生きと描かれている（→「（注釈）クアム・トー・ムオン」）。

3、 黒タイの親族組織については、政治組織との関連で仏領期以来、研究者の関心を集めてきた。黒タイ（白タイ）は父系的に継承される姓をもち、伝統的には社会階層制と姓は明確に結びついてきたからである。しかし、報告者は村落で実践されている親族関係の研究から、従来の社会構造論のように親族が社会関係の核となる単位であり、その構造は固定的であるなく、むしろ、政治的、経済的関係などに対応しつつ、親族関係のあり方も変化していくことを理解した（→口頭発表「黒タイ親族研究概論」）。黒タイの場合、父兄出自理念がキン（狭義のベトナム人）や中国の土司制度にもとづく姓の導入、家譜のような文書資料を通して歴史的に、貴族階層から浸透していったのであろうと、報告者は仮設している（→「マイソンにおけるロ・カム家の祖先名簿」〔黒タイ語・ベトナム語〕）。

以下が、報告者の成果目録である。2000年10月から2001年3月の留学時の成果に基づくものも含んでいる。

#### 1) 出版物による業績

・ 榎永真佐夫2001.7 「インドシナ内陸山地衣装へのまなざし」『月刊みんぱく』2001年7月号、14-16頁。

・ 榎永真佐夫2001.12 「山間盆地の地域性? 西北地方ターイの俗諺から」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』第3号、風響社。

・ 榎永真佐夫2001.12 「資料：ムオン・ムアットの黒タイ慣習法」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』第3号、風響社。284-351頁。

・ 榎永真佐夫2002.2 「黒タイの伝統的政治体系? ベトナム、ギアロ調査より」『民博通信』95、59-76頁。

・ 榎永真佐夫2002.3 「<ムオン・ムオイの黒タイ慣習法>について」『国立民族学博物館研究報告』65-3：361-447

・ 榎永真佐夫2002.7 「インドシナ内陸山地衣装へのまなざし」『月刊みんぱく』2001年7月号、14-16頁。

・ 榎永真佐夫2002.5 「ラックカイガラムシ」『月刊みんぱく』2002年5月号、20-21頁。

・ 榎永真佐夫2002.6 「拡張するデルタ世界? ベトナム西北地方フーイエン紀行」『民

博通信』97号、29-32頁。

・ 榎永真佐夫2002.8 「ベトナム?北部少数民族の染織物と衣装」久保正俊・高橋晴子編『(みんぱく発見7) 田中千代コレクション?世界の民族服と日本の洋装100年』財団法人千里文化財団、51-52頁。

・ 榎永真佐夫2002.10 「ベトナム語を話さないベトナム人」国立民族学博物館監修『季刊民族学』102(2002年、秋)財団法人千里文化財団、69頁。

・ 榎永真佐夫2002.11 「書評:『黄金の四角地帯?シアン文化圏の歴史・言語・民族』」『アジア・アフリカ地域研究』2:326-332。

・ 榎永真佐夫2002.12 「ベトナム西北山地の国際関係論?ラオカイ省タンウエン調査より」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』4号、(印刷中)

・ 榎永真佐夫2002.12 「ベトナム現地調査指南」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』4号、(印刷中)

・ 榎永真佐夫2002.12 「(注釈)クアム・トー・ムオン?ムオン・ムオイの黒タイ年代記」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』4号、(印刷中)

・ 榎永真佐夫2003.1 「ベトナムは単一民族国家か」『月刊みんぱく』編集部編『キーワードで読みとく世界の紛争』河出書房新社、83-86頁。

・ CA m Tr"ng vo Kashinaga Masao, 2003, Danh Sach TA Ti'n H" L k CA m I Mai SIn (os fi wHN va sGi LO KA j tē wMG MUK) 「マイソンにおけるロ・カム家の祖先名簿」, Ho NEi: NxbCTQG. (印刷中)

## 2) 口頭発表による業績

・ 2001年10月17日、「黒タイの親族と社会組織」、第136回みんぱく研究懇談会(於・国立民族学博物館)

・ 2002年8月27日、「ベトナムにおける現地調査の現状」ベトナム研究会<於・ハノイ貿易大学ベトナム日本人材協力センター(VJCC)>

・ 2002年9月24日、「ベトナムにおける戸籍・居住登録と国勢調査」<、於・ハノイ貿易大学ベトナム日本人材協力センター(VJCC)>

・ 2002年12月19日、「黒タイ親族研究概論」ベトナム研究会<、於・ハノイ貿易大学ベトナム日本人材協力センター(VJCC)>